

雨恋（あまごい）

中西 真理

人 物

ゆな（14）百姓の娘

花（14）百姓の娘

石川運慶（20）雨乞い師

ひで（33）ゆなの父

ともえ（30）ゆなの母

さと（31）花の母

村人 ▶

○土佐山村・山道

「1216年」

大雨が降っている。

血だらけのゆな（14）が、血と水が混ざった泥の中で狂ったように踊っている。

1

○（以下回想）土佐山村田畑

「4日前」

田畑が乾ききってひび割れている。

○ゆなの家・炊事場

床に伏せているともえ（30）を看病をしているゆな。

ともえ「ゆな、水……」

ゆな「ちよつと待ってね」

2

○同・外観

ゆなが慌てて水瓶の中を確認する。  
しかし、中身は空っぽ。

ひで（３３）が現れる。

ひで「だめだ、今日もひどく晴れてやがる」

ゆな「おっとう」

ひで「このままじゃ村ごと餓死にだ」

ゆな「……きつと今日の千駄ぎ祭りで龍神様が雨をふらしてくださいよ」

ひで、ゆなの肩を掴み大声で、

ひで「わかっているのか！ もしそれで降らなかったらお前か花が」

ゆな「……分かってる」

ゆな、かすかに震えている。

ゆな、震えに気づかれないようにひでの手を肩からおろす。

ゆな「私、水汲みに行ってくる」

ゆな、桶を持って走って去っていく。

ひで「くそ！」

○川

ゆなが川に來ると先に花（１４）が水を汲んでいる。

川の水量は枯渇しそうなほど少ない。

ゆな「花！」

ゆなは花を見つけると笑顔になる。

花もゆなに気づくと活発に笑う。

花「ゆなも水汲み？」

ゆな「うん！」

花「川の水、うんと少なくなっちゃったね」

ゆな「……うん」

花「今日のお祭りで雨、降ると思う？」

ゆな「降って、ほしい」

花「でもさ、もし降らなかったら？」

ゆな、とまどうが絞り出すように、

ゆな「花は安心して。きっと私が選ばれる」

花「そんなの分かんないよ。決めるのは雨乞

い師の石川様なんだから」

ゆな「石川様だって、きっと私みたいな暗い

子より明るくて元気な花を生かしたいって

思うはず」

花「そんなこと言い出したら、私みたいなお

転婆より女の子らしいゆなの方が」

そう言う花の手が震えている。

それに気づいたゆな、花の手をそっと握り、

ゆな「……ごめん」

花「ううん、悪い方にばっか考えちゃうよね」

ゆな「……うん」

花「私さ、村のためだって頭では分かっているけど、ほんとはずっとおっかあやおっとう、村のみんな、それにゆなと生きていきたいってどうしても思っちゃうの」

ゆな、花の言葉に驚く。

花「私、最低だよな」

ゆな、泣きそうな顔で笑って、

ゆな「そしたら私も最低だ」

ゆなと花、無言で見つめ合う。

花が空気を換えようと明るいうちで、

花「私ね、もし贖に選ばれたとしても、死ぬ前にいっただけやりたいことがあるの」

ゆな「やりたいこと？」

花「私、恋してみたい！」

ゆな「ええ！　恋！？」

花「あ、今、ばかだつて思ってるでしょ！」

ゆな「お、思ってたないよ。でも、恋なんて：

…きつとつまんないよ」

花「ひどい」

花、ゆなに向かって笑いながら川の水  
をかける。

ゆな「あ！　水がもったいない」

花「あははは」

### ○土佐山村・夜叉ヶ滝

大量の薪木に火が付けられ燃えている。

その周りで村人たちが太鼓を叩いたり

踊ったりしている。

皆、笑顔で苦しげな表情。

ゆなも苦しげな表情で踊っている。

ゆなの踊りは見事で何人かがゆなに見

惚れている。

ゆなが踊り終わると、石川運慶（20）

が拍手する。

石川は整った顔立ち。

村の若い女性がちらちらと石川を見て  
いる。

石川「ゆなの踊りは見事だな」

ゆな「石川様」

ゆな、頭を下げる。

石川「ゆなの踊りにきつと龍神様も答えてく  
ださるだろう」

ゆな「そうだと良いのですが」

石川「踊るのは好きか？」

ゆな「はい、踊っていると自分の中の泥のよ  
うな部分が水に晒される気持ちになります」

石川「泥のような部分とは？」

ゆな「それは……」

石川、微笑む。

石川「未だかつて正しきは邪に勝たず」

ゆな「え？」

石川「私もよく知らぬが、正義は邪には決し  
て勝てぬという意味の言葉のようだ」

ゆな「そんな」

石川「しかしそれもまたひとつの真実。悪は強い。ゆなも自分の泥を受け入れ強くなれ」

ゆな、手で服をぎゅっと掴み、

ゆな「はい」

石川、微笑みゆなの頭を撫でる。

ゆなは少し微笑んで石川を見つめる。

○ゆなの家・外観

ゆな、空を見上げる。カンカン照り。

○川

桶を持ったゆなが川に着くと石川と

花が話しているのが見える。

花は嬉しそうに笑っている。

ゆな、それを見てひきつった表情。

ゆな、慌てて石川と花の元に走る。

ゆな「花！」

花「あ、ゆな」

石川「それでは、私は行くとする」

花「はい、石川様、ありがとうございます！」

石川去っていく。

ゆな、ぎこちない表情。

ゆな「い、石川様と何話してたの？」

花「え、んー？ ふふ、ひみつ」

花、鼻歌を口ずさむ。

ゆなの額に汗が浮かぶ。

○ゆなの家・居間（夜）

ひでとゆなが食事をしている。

突然、ひでが泣き始める。

ひで「このままじゃ俺は妻も娘も失っちゃまう」

ゆな、箸を置き、ひでに寄り添う。

ゆな「大丈夫。おっかあは雨が降ってたくさ

ん米が食べられればきつと治るから」

ひで「お前はどうか？ お前も大事な娘だ」

ゆな、無言。

ひで「ゆな、明日の夜、石川様の家へ行け」

ゆな「……どうして」

ひで「お前が助かる方法を村のもんじに聞いた。

黙っていけ」

ゆな、何か言おうとするが止める。

○同・寢床（深夜）

ともえがゆなを起こす。

ともえ「ゆな、悪いけど厠へ連れてってくれるかい」

ゆな「うん」

○同・厠（深夜）

ゆながともえを抱えて外の厠に来る

と、花が歩いて行くのが見える。

ゆな、それを見て考え込む。

○土佐山村田畑

カンカン照りの中、ゆなが走っている。

○花の家・玄関

さと（31）がゆなを出迎える。

さと「あら」

ゆな「花、いますか？」

○同・寢床

花が寝ている。

ゆな「大丈夫？」

花「うん、ちよっとお腹痛いだけ」

花、嬉しそうに笑って、

花「ゆな、私やりたいこと叶ったよ」

ゆな「え？」

花「恋ってこういう気持ちなんだね」

ゆなの表情が固まる。

ゆな「花、恋したの？」

花「（嬉しそうに笑って）うん」

ゆな「一日で？」

花「そう」

ゆな「き、昨日、何かあったの？」

花「うん、あったよ。すっごく特別なこと」

ゆな、シヨックを受けた表情。

ゆな「そ、そんなの恋じゃないよ。たった一

日で誰かを好きになるなんて、変。花の勘違

いだと思う」

花、ゆなの言葉に少し驚いて、

花 「勘違いじゃない。ゆなも恋してみれば分かる」

ゆな 「そんなの……贅の儀式、明日なんだよ？」

花 「うん、でももう大丈夫」

ゆな 「大丈夫って、どうして？」

花、何も答えないが穏やかに微笑む。

○ゆなの家・玄関（夜）

ゆなが出かける。

ゆな 「行ってきます」

○土佐山田畑（夜）

ゆな、道に座り込み晴れ渡った空を見上げてみると、石川が歩いてくる。

石川 「ゆなか？」

ゆな 「石川様？」

石川 「ちようどよかった。今そなたの家に呼びに行こうとしていたのだ」

ゆな 「私を呼びに……？」

石川 「家に来るがよい。ゆっくり話そう」

ゆな、とまどいながらも頷く。

○石川の屋敷・寢床（夜）

ゆなと石川が向かい合っている。

石川の後ろにはござが敷かれている。

石川「ゆなは知っているか？ 私が気に入った娘は贅にはされないという村の噂を」

ゆな、少し間をあけて、

ゆな「いいえ……知りませんでした。しかし、そのような嘘の噂に私は惑われません」

石川「嘘ではない。そなたが私に体を許せば、その命助けよう」

ゆな、驚く。

石川「さていかに。決断せよ」

ゆなの手が震える。

○同・外観（夜）

虫の鳴き声。

○同・寢床（夜）

ゆなと石川が向き合っている。

ゆな「石川様は花と私の抱き心地を比べられるという事ですか？」

石川「……必要なことなのだ」

ゆな、唇を噛み、

ゆな「お」

石川「ん？」

ゆな「お断りいたします」

ゆな、頭を深く下げる。

石川、じつとゆなを見つめる。

ゆな、緊張した表情。

石川「そうか。では、さっさとここから去れ」

ゆな「……はい」

ゆな、出ていこうとするが、戸に手を

かけたあと立ち止まり振り返る。

ゆな「これで、花は助かるのですよね？」

石川、無言。

ゆな、石川から返事がないため、

ゆな「失礼いたします」

と出ていく。

○土佐山田畑（深夜）

ゆなが一人歩いている。

ゆな「おっとう、ごめん」

ゆなの目から涙が流れる。

ゆな「やっぱり恋なんてつまんないよ」

○ゆなの家・炊事場（朝）

ゆなが料理をしていると、ひでが慌てて入ってくる。

ひではゆなを見つけると抱きしめる。

ひで「ゆな！」

ゆな「おっとう？ どうしたの」

ひで、泣き始める。

ひで「助かったぞ！ 石川様は花を選ばれた！」

ゆな、目を見開いて驚く。

ひで「そりゃ、花には悪いが俺はほんとにほっとして」

ゆな、ひでが言い終わる前に炊事場から慌てて出ていく。

○土佐山田畑（朝）

カンカン照りだが、強い風が吹いている。

必死で走るゆな。

○花の家・居間（朝）

ともえ（30）が泣いている。

ゆなが勢いよく入ってくる。

ゆな「花は？」

ともえ、一瞬ゆなを見るが、ただ首を振って泣き続ける。

ゆな、花の家を出ていく。

○土佐山田畑（朝）

必死で走るゆな。

ゆな「お願い」

○土佐山・山道（朝）

花と石川が歩いている。

石川「早く歩け」

花は後ろ手に縛られ、泣きながらふらふらと歩いている。

花「ゆなはそれほどまでに石川様をお喜ばせになったんでしょうか？」

石川、無言。

花「ですが、石川様はひとつ勘違いしておられます。ゆなには石川様を思う気持ちがありません。それは親友である私が一番よく分かっております。あの子はまだ恋など知らないのです。しかし、私は石川様のことを心から慕っております」

石川「どれほど命乞いしても、もう決まったことだ。覆らん」

花「う……うう」

花、嗚咽を漏らして泣く。

○土佐山田畑（朝）

ゆなが走る先に、村人△が水不足で一部枯れた稲を鎌で刈っている。

村人△は一仕事終えて、鎌をその場に置いて去っていく。

ゆな、足を止めてその鎌をじっと見る。

ゆな、鎌に手を取る。

○土佐山村・夜叉ヶ滝（朝）

花が滝を背に座らされている。

石川が花の前で刀の鞘を抜く。

花「（泣きながら）石川様、どうかおやめくだ

さい。お助けください」

石川、刀を振りかざす。

花「ひっ」

瞬間、ゆなが花の前に飛び出し、ゆなの前で土下座する。

ゆな「石川様！ お待ちください！」

石川「ゆな？」

花「……ゆな？」

ゆな、顔をあげる。

ゆな「どうか考えをお改めください。私がお助  
になります。ですから、どうか花だけはお助  
けください」

花「ゆな……」

石川「ならぬ。花の方がふさわしいのだ」

ゆな「どうしてでしょうか？　贄は若い娘で

あれば良いはず」

石川「それは、ひとつの条件にすぎん」

ゆな「他に何か条件が？」

石川、ため息をついて刀を下ろす。

石川「龍神様は池が穢れるのを嫌う。それを  
洗い流すために、大雨を降らしてくださいの  
だ」

ゆな「それが、どうして花の方がふさわしい  
という理由になるのでしょうか？」

石川「こやつは、自分が助かるために体を差  
し出した。しかし、ゆな、お主は友を助ける  
ために私の誘いを断った。花は、肉体、魂共  
に穢れておる」

ゆな、花を見る。

花、気まずい表情で目を逸らす。

ゆな、傷ついた顔。

石川「分かったな？」

ゆな、絞り出すように声を出す。

ゆな「……それは違います。花は……花は、ただ石川様を好いていただけ。死ぬ前に一度だけ好きな相手と心を通わせたいと思うのは、穢れたことでしょうか？」

花「ゆな……」

石川「……」

ゆな「それに、私が石川様のお誘いをお断りした理由は他にありません」

石川「何？」

ゆな「私は……」

ゆな、意を決した表情で、

ゆな「花が好きなのです。友という意味ではありません」

ゆな、花の目をまっすぐ見て、

ゆな「ずっと前から花に恋しております」

花、驚く。

石川、冷たい表情で二人を無言で見下ろす。

ゆな「私は死ぬのが怖かった。花とずっと生きてゆきたかった。でも、どちらかが死なねばならないのなら……花に生きて欲しい」

花、動揺して言葉を失っている。

ゆな「同じ性の人間に恋するなど、私の方がよっぽど穢れています。私の心にはずっと泥が溜まっています。ですから、石川様、どうかお願いします」

石川、少し考え込む。

ゆな、石川が考えている様子を見て、嬉しそうな顔をし、

ゆな「石川様、ゆなの言う通りです！ 同性に心を寄せるなど、ゆなは穢れております！」  
ゆなの表情が凍りつく。

石川「決まりだな」

花、嬉しそうな顔で、

花「では？」

石川「やはり贄は貴様だ」

花、打って変わって絶望的な表情。

花「そんな」

ゆな「お、おまちください」

石川「もう待てぬ。村のものが雨を待ち侘びておるのだ」

石川、刀を振り下ろそうとする。

ゆな、隠していた鎌を取り出し石川を切り付ける。

石川「う……」

石川、よろよると座り込む。腹から血が滲んでいる。

花「石川様！」

ゆな、石川の上に乗し、何度も鎌を振り下ろす。

ゆなの様子に怯える花。

石川が動かなくなり、大量の血が池に流れ落ちる。

空が曇っていく。

ゆなが顔にかかった返り血を袖で拭く。

花「ひっ」

ゆな、黙って花の紐を鎌で切る。

ゆな「花を助けるにはこうするしかなかった」

花「な、なんてこと」

ゆな「石川様には申し訳ないことをした。でも、私は花が生きてくれるだけで」

ゆな、花を抱きしめる。

しかし、花はゆなを振り解く。

花「やめて！ 気持ち悪い！」

ゆな、目を見開き傷つく。

花、死んだ石川に駆け寄る。

花「石川様！ 石川様」

花、死んだ石川をじっと見つめ、

花「いやああああ！」

石川に覆いかぶさり泣き始める。

その様子を呆然と見つめるゆな。

鎌から手を離し、その場を去っていく。

○土佐山村・山道（朝）

血だらけのゆなが山を降りていると、

ぽつぽつと雨が降り出す。

ゆな、手のひらを上に向け、天を見上げる。

ゆな、微笑む。

ゆなの足元がどンドン軽やかになり、やがて踊りに変わる。

○土佐村田畑（朝）

村人たちが空を見上げて雨を喜んでいる。

村人 ▶ 「雨だ！ 龍神様のお恵みだ！」

村人たちが大はしゃぎで抱き合ったり踊ったりしている。

血だらけのゆなが踊りながら現れるが村人たちは雨に大喜びでゆなに気づいていない。

ゆなは血を雨で洗い流しながら、狂ったように踊り続ける。

了

